

バーサーカーになったら  
ら会話が出来なくなっ  
たんだがw

きらきら

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何やかんやで転生したオリ主が、失った未来を取り戻す為に奮闘する物語



(特別意訳 : ガチャ回させろよWWW)

# 目次

DQN死すべし慈悲はない	1
話聞かない系女神ってマジ女神	6
俺たちの物語はこれからだ！↑なおボツ	
チ	12
邂逅	17
頭のおかしいパーティー+バーサーカー	31
冒険者登録	46



# DQN死すべし慈悲はない

イヤツフオオっおおお!! ついにこの時が来ちゃいましたよww

ぐだぐだイベ礼装狙いで呼符回してたらヘラ来るとかww ついに宝具レベル5になつたぞいww いやマジで長い道のりだったわww

画面に映し出される宝具レベルアップと効果音と共にその下にあるLevel5という表記を食い入るように見る。

いやまさかここで来ちゃいますかww HF公開記念で宝具レベル2から4まで上げれたがそこから地獄になつたなw まさか2ヶ月分の給与の使うとかw それでも出ないガチャはマジで糞すぎるw 何でだよ? 黒王はとつくに宝具レベルマになつてひたすらレアプリになつていくのにどうしてヘラが出ねえんだよ? おいピックアップさんマジで仕事しろ(恫喝)。クラス別とかは地雷臭がしすぎたから安定のスルーをして次回のピックアップ待ちの姿勢に入ってたんだがw

駅のホームで楽しい楽しい社畜ライフへと誘う電車お迎えを待ちながらイベ礼装が出たらいいなあと思いいながら単発を回す。金色の光。「ん?」クラスはバーサーカー。「んん

？」ヘラクレレス召喚。「ヨツシヤアアアッ!!」↑今ここ。

突然騒ぎ始めた自分を周りの人は迷惑そうに見てくる。髪を金髪に染めたイキリキッズ<sup>DQN</sup>が睨んでくる。おottoと興奮しすぎたようでおじやる。取り敢えず頭をサーセンwと胸の中で言いながら下げる。そんな些事よりもバーサーカーである。聖杯入れてレベルは100で当然スキルマ。星4フォウもイベの時と毎月のレアプリ交換でコツコツ手に入れてカンストして、今日ついに宝具レベル5になった。残りは絆レベル上げで現在12であり15まで目指すだけである（最終試験）。

フハハハハッ！うちのバーサーカーは最強なんだ！（雁夜おじさん感）

やっぱヘラクレスってカツコ良すぎますわw SNでも全裸王相手にイリヤをずっと守りながら戦うとかマジでパネエっす。しかも己が神話を乗り越えるとかガチで鳥肌立ちました。何も出来なかつた正義くんは黙ってて下さいねーw

劇場版HF2章でもセイバー戦マジでヤバかつたっす。もうなんつーかド派手でした。語彙力なくてサーセンw つか腹ペコ王強くな？青から黒にイメチェンしただけで何であんなに強いのか？あつ、ハンバーガーのせいかな…（悟り）【悲報】正義マンくん、黒聖杯にマイ鯖を寝取られてたw

1章の怪人青<sup>ケルトのワンちゃん</sup>タイツとハサン先生より演出は派手だったと思います（当社比比べ）なお1章では毎回の如くする正義<sup>アイチャイ</sup>の味方とランサーの戦闘はカットされた模様。是非も

ないヨネ！良かったね正義くん！死ぬとこダイジエスト<sup>カッ</sup>されてたよw

共通ルートで毎回やってるしオマエ等も飽きてるよなw

そんな事より何でもかんでも責任押し付けられるガス会社さんはそろそろ聖堂教会と魔術協会を訴えてもいいと思います。これマジで。

警笛が鳴る。

おつ。そろそろ電車来るか。この通り過ぎていく次の電車がお迎えだな。

アーラシユパイ先あざしたw 後はス<sup>圧</sup>パ<sup>制</sup>ル<sup>者</sup>タク<sup>キ</sup>スとフレ頼光が何とかします。アー

ラシユパイ先がいつも通り爆散してキラキラになると、

ドンツ。

「サーセンw」

と肩をぶつけてきたニヤケ面のキッズAがこちらをヘラヘラしながら笑ってくる。後ろのキッズB&Cもニヤニヤしている。殴りたいこの笑顔（ニッコリ）

そんな事より衝撃でスマホが手からすっぽ抜ける。

ノオオオオオッ！スマホケースをコ○バースのにしたら滑り止めなくてツルツルで滑りやすいんだよ！

線路に落ちるスマホ。咄嗟にルパンダイブする。スマホは：ギヤアアア！画面割れてるうう！？あ、でも操作出来るなこれ。スパルタク스에宝具撃ってもらってと。

「おいーさっさと上がれ！」

るっせえな。俺の周回の邪魔すんじゃねえっつーの。頼光さん出番です。サクツと殺っちやて下さい。

「もう電車が!？」

るっせえな。ガタガタガタガタ…ってこれ電車の音か。ん？左には電車が…ってアレ？何か車掌さんめつちや慌ててね？つか俺ちゃん線路の上にいんじゃない。

電車と○○の距離13m

つーか周りがゆっくりしてる中で何でこんな普通の速度で俺ちゃん考えてんの？え、走馬灯ってやつ？

電車と○○の距離9m

まさかの俺ちゃん終了のお知らせww

オワタww\ (^o^)/

ってふざけんなし！こちとら水着沖田さんの実装待つてるんだよ！今年されるって噂されてるんだよ！つかぐだぐだイベの続き気になるんだけど！本当にファイナルなの!？

電車と○○の距離4m

ってもう無理か…。なら最後に…



DQN死ねっ!!くたばれっ!!fuck

y o :

電車と○○の距離0m

グシヤツ!!

中指を立てた右腕が宙を舞った

## 話聞かない系女神ってマジ女神

ハッ。此処は一体？気が付けば周りが暗く何処までも広がっているとポツンと椅子に座っていた。

あ：ありのまま今起こった事を話すぜ！「俺ちゃんは電車に轢かれたと思ったらいつのか妙な場所にいた」な：何を言っているかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった：頭がどうにかなりそうだった：催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ

：「○○さん。ようこそ死後の世界へ。」

後ろから声が聞こえて来る。かつかつと足音が響く。

「あなたはつい先程不幸にも亡くなりました。」

そして自分の前の椅子に如何にもTHE女神と言った美貌の女性が座る。

「短い人生でしたが、あなたは死んだのです。」

そんな事より自分のiPhone知りませんか？

「……。私の名前は△△。日本において若くして死んだ人間を導く女神です。」

ねえねえ話聞いている？どつかのRPGの人の話を聞かずに勝手に話を進めてくキャラじゃないんだからさ、人の質問にはちゃんと答えようよ？

「……あなたのiPhoneはあなたの足下にあるじゃないですか？」

え？言われた通りに見てみるとそこには粉々になったiPhoneだったものがあつた。

嘘だつ！（レナ感）

「いや最初から目に入ってしまったよね？さっきガン見してましたよね？どんだけ認めたくなかつたんですか？」

呆れてこちらを見る女神△△。もうやめて！○○のライフはもう0よ！

ああ、アアアアアアアツ!!ふざけるな！ふざけるな！バカ野郎！ウオー！（切嗣感）

データが！くっそ今までどんだけ課金してきたと思つてんだよ!?!それに金だけじゃない！アンリマユ宝具5にすんのにどんだけフレポ回したんだと思つてんだよ！

（うわあ。ガチ泣きしていますね…。少し記憶を覗いて見ましようか。）

（ええ…。これはひどい…。とんでもない重課金厨じゃないですか。給料から必要最低限の生活費を抜いた後は半分は実家に送って、残りの半分は課金して…。仕事でもAPが余りそうになったらするとか…。それに毎朝感謝の100連ガチャって何ですか

意味がわかりませんしわかりたくもありません。て言うかグー〇ルに勤めてたんですか！驚きです。でも少し可哀想になってきましたね…。」

20分後、

「よしよし、大丈夫ですよ。ほら此処にはあなたを傷つけるものはいませんよ。」

やだ….:いやだよ….:こんなひどい….:あんまりだ….:うう….:かえして….:かえしてよ….:グスッ。

(まさか大人の頭を撫でる日が来ようとは…。じんせい 紳生わからないものです。…まあ嫌いじゃないですけど。うーん。どうすれば元気になってくれるでしょうか？そうだった！この提案は喜んでくれるのでしょうか!?)

この女神、アクア 先任から引き継いだばかりの経験の浅い若手女神であり、周囲からは有能だと期待されており実際にそうなのだが…:実は相手がダメ男であればあるほど尽くしてしまおうという悪癖がある。そして〇〇が初めて導く人ということもあって…

「落ち着きましたか?」

何だか頭がぼんやりして記憶が曖昧で…。iPhone、電車、DQN….:うっ、頭が!まあこの女神様(一応)は何処か信頼できそうっぽい。何故かわかる。(。D。)ハッ!これがかもしかして運命の出会い…?な訳ねえかw

「ごほんっ。あなたには3つの選択肢があります。このまま全て忘れてゼロから新た





王つてのぶつ殺せばいいのw？ 一般ピーポに何求めてんだよw

…ヒュー！無重力で回転キメんのたーのしーw

→現実逃避

やっぱ何か気持ち悪くなってきたんだけど…。

「さあ旅立ちなさい！」

やべえマジで吐いていいすかw 無重力気持ち悪！

白い光に包まれて何も見えなくなつた。

# 俺たちの物語はこれからだ!↑なおボツチ

え?ここ何処?

見渡す限り青空が広がる草原にいた俺ちゃん。妙に高い視点になっているが、そんな事は気にせず取り敢えずは:

おぼろろろろろろろろつ!!

地面に両手をつけて派手にキラキラを出す。

やつベマジで無重力無理w あんなに気持ち悪くなったの初めてなんですけどw

ふーwスツキリしたーw まさか浮遊系アトラクション駄目だったとは驚きw つ

か自分の手見て気付いたことがあるんだ。

黒くね!?それにすごく:大きいです(ボソツ

てか身体自体もでつけえしめつさ筋肉盛ってんじやんw やっぱ、胸筋やつばw 頭

おかしすぎて草しか生えねえw

てかてか!もう一つ気付いたことがあるんだ。さつきからずっと独り言言ってたん



がな？

→こんな風にしか実際に言語化出来ねえのだがw

コミュ障おつw

てかもう薄っすら気付いてたんだけどヘラクレスになってんじゃん?!?だって足下に見覚えのある斧剣刺さってるし！

無理無理w 型月世界に転生憑依とか生存不可避w え？ゴールドPに確定でぶつ殺されるの？ 嫌すぎるw でもイリヤと過ごせれるのか…。アリです！

おや？空からこちらに向かってヒラヒラと手紙が落ちてくる。自分と文通したいとかどんな奇特なガールかしらん？↑野郎という線は微塵も考えていない

「この手紙を読んでいるということは無事に転生できたみたいですね。特典のヘラクレスの肉体は馴染んでいるでしょうか？だとしたら幸いです。それと最後にもう一つだけ贈り物をお願いしますね。あなたのお役に立つと思いますよ。魔王を是非、あなたの手で打ち倒してください。byあなたの女神より。」

読み終わったあと手紙はキラキラと粒子状になって消えた。…まあんな事よりだ、  
お前のせいだからw  
……！

死亡フラグとチート能力がゴロゴロ転がってる型月世界じゃねえことは救いだが…

イリヤに会えねえのかw やっぱ残念だわw w

まあプラスに考えよう。あのヘラクレスになれた事はまあ嬉しいけど、嬉しいけどつ  
! (強調) ぐだぐだイベ続きやりてえw FGO出来ねえの辛えw w それにこんな  
世界じゃHF3章見れねえじゃん! やっぱ魔王つての倒さなきゃなんねえのかw 他  
にも異世界転生キッズいるらしいし急がなきゃなw まあヘラなら大丈夫っしょ(慢  
心)

てか考えたらヘラの身体で俺ちやんゲロ吐いてたんだよな?

申し訳なさ過ぎて死にてえw w w w w w w w w w w w w w w w

よし落ち着いた。うん落ち着いた。Be cool!

そんでお役立ちアイテムって何だよ? 全然見当たらねえじゃん? カンペしかねえ  
じゃん?

え? これっ!?! お役立ちアイテムってカンペかよ? 草w w 取り敢えず拾ってみる  
かw

拾ってみると、頭の中に情報が流れ込んできた。

アンリミテッド・ペーパー・ワークス

無限の厚紙



が搭載されており、書きたいと思った内容が脳の電気信号を読み取る事により、ペンを握るだけで手が動きます。

そしてこのペンの一番の特徴はなんと！無くした際に戻ってこいと念じるだけでそこから文字通り飛んできます！まさにアク〇オ！ですね！

物をしょっちゅう無くしてしまう… ペンをついつい飛び道具として投げってしまう… そんな人もその悩みとは永久におさらば！画期的なペンですね！。

本商品は普段は霊体化しており、ユーザー登録をすることで、使い時に何時でも何処でも取り出して使える仕様となっております！どうぞこのカンペとペンを使って素敵な筆談ライフを楽しんでくださいね！

p. s この商品の運送は安心安全迅速にがモットーの総合運送会社、アマゾネス・ドットコムが担当しています。アキレウス〇ね！

え？無駄に高性能すぎじゃね？（驚愕）

## 邂逅

「カズマ！ 今日こそはあの憎つくきカエル共をぎったんぎったんにするわよ！」

「いやお前前回ヌルヌルにされてんのにどっからそんな自信湧いてんの？ 馬鹿なの？ さすが駄女神、学習しない。」

「むつきー！ 女神に対して何よその言い草は！ ゴツトブロー食らわせるわよ！」

「カズマ！ カズマ！ 早く行きましょう！ 私の爆裂魔法を撃ちたいという欲求が抑えられません！ もうここで撃つていいですか!？」

「だあー！ お前は耳元で騒ぐなうるさい！ 倒れるならせめてカエルの何匹か吹っ飛ばしてから倒れるよ！ 今ここで撃つても絶対背負わねえからな！」

「おいカズマ、先程言った通りにもし私がカエル共に翱られていようともし助けなくていいからな？ アクアとめぐみんのフォローに徹していればいいからな？ 私は皆を守るクルセイダーだから身を挺してかばってそして…ああんっ！」

「黙れドMクルセイダー。」

「はあんっ！」

(チツ、何でクエストに行く前からこんなに疲れなきやいけないんだよ…)

今回のターゲットであるジャイアントトードがいる平原を目指して森の中を進んで行く一行。

「あれ?」

「どうしためぐみん?急に立ち止まって?トイレか?ならさっさとその茂みでもして来いよ。」

「紅魔族はトイレ何てしませんって前言ったでしょうが!?てかうら若き乙女に向かって茂みでトイレしろってあなた鬼ですか!」

先頭を歩いていためぐみんが止まった為に全員が足を止める。

「はいはい。紅魔族はトイレ何てしませんでしたね。トイレじゃないんだったらどうしたんだよ?」

「その…先の方で何か獣が吠えているような声が聞こえませんか?それに今地面揺れませんでした?」

「ああ?」

耳をそばだてる一行。

「…確かに聞こえるな。でもこんな吠え声のモンスターなんて近くにいた覚えは無いのだが…?もしや新種のモンスターか!……………」よしカズマ行こうっ!」

「いやお前何目輝かしながら言っただよ！どうせ絶対碌でもねえ事考えてんだろ！」

「なっ！新種のモンスターによる未知の攻撃なんてき、期待してないぞ！ぶ、侮辱するのもいい加減にしろ！」

「思いつきり期待してんじやねえか！？この真正マゾが！」

「ふっ、どのようなモンスターが来ようと私の爆裂魔法で跡形もなく吹っ飛ばしてやりましょう！」

「一発で仕留められなかったらどうすんだよ！？数が多かったら！？お前おぶって戦闘なんてゴメンだぞ！？こういうのは適当にギルドに報告すればいいんだって！」

「取り敢えずさっさと行くわよ！カズマ！」

「引っ張るなってアクア！？ちよっ、力強っ！？お前ら、人の話聞けーっ！」



あのと引き返していればこんな事にならなかったのかもしれない。

目の前で自分の顔を睨みつける赤と金の双眸を見つめながら俺はそう思った。







吠えて一直線に飛び込む。そして右腕で斧剣を振りかぶって頭に振り下ろした。

「グウベー！」

ヒヤツハーw ミンチにしてやったぜw うわ！ ピンクのグジュグジュしてんの  
キメえw

頭が爆散して地面に大きなシミを作り、脳漿やら血やらがべつとりと付いた斧剣を引き抜く。

さすがバーサーカーw 幸運B以外は全てA以上というステータスは伊達じゃない  
ぜw つか俺ちゃんこんなG18グッなのオツケーだったけ？もしかして精神が肉体俺ちゃんに引  
きづられて近づいてんの？

まあどうでもいいかw レッツ、パーリータイム！

「カズマ、カズマ！あっちの方にジャイアントトードがたくさん固まっていますよ！  
ここからだどギリギリ届きますし撃つていいですか!？」

「まあ落ち着けて、取り敢えず千里眼で様子を見てだな…。」

「えーとどれどれ…。は？」

口を半開きで間抜けな顔を晒すカズマ。

「ブークスクスツ！カズマさん、何よその顔！まるで鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔してるわ！」

鉛色をした巨人が、打撃に強いはずのジャイアントトードを素手で一瞬で血煙に変えていた。

「るっせえよ！んな事より何かヤベー奴がいるんだが！え、あれ人間？モンスター？まあ刺激しないようにとつとつとつから離れ！」

「エクスポロージョン！」

巨人が爆発に巻き込まれて見えなくなった。

「あんの馬鹿あああああつ！」

「フフフ……。どうでしたかカズマ？今回の私の爆裂魔法の出来は……？カエル共も一網打尽だったでしょう……？」

うつ伏せになりながら問うめぐみん。

「最つ悪だよ！あそこに人（一応）らしきものがいたんだぞ！どうすんだよ！」

「………………。ハハハ、とつても面白いジョークでしたね！……マジですか？」

ダラダラと滝のように冷や汗が流れるめぐみんに対して追い打ちをかけるように、

「ああ！千里眼で見っていたところ、ギリギリ巻き込まれる位置にいたぞ！」

「………………。カズマ、あなたは何も見ていませんし私は何もしていません。もし何か見たとしてもそれは人型モンスターだったんです。いいですね？」

「いやよくねえだろおおおお！確かにモンスターっぽい感じもしてたけどおお！」

「ならいいじゃないですかああ！どっちにしろどうせ被害者はもういないんですし！」

「おま……」



咆哮が響き渡る。

「ヒッ！何ですかこの声は！」

「ッ!?まさか!？」

慌てて先程爆発に巻き込まれた鉛色をした巨人のいた場所を見ると、五体満足で立って空に向かって吠えていた。そして：目が合った。

ヤバイ！これはヤバイ！

頭の中で警鐘が鳴る。生存本能が叫んでいる。アレには絶対に勝てない、と。

「急いでここを離れろぞ！」

そう言っただけで乱暴にめぐみんを背負うカズマ。

「ギャアアアア！ちよつと人が動けないのをいい事にどこまさぐってるんですか!？」  
「し、知るか！お前のち、ちつぱい何か触っても別にこ、興奮なんてしないしっ!」

「ちつぱい!?!後で覚えておいてくださいよ!?!」

「おいアクア！こつから離れつぞ！つてダクネスは!?!」

「んー？ダクネスならさつき「少々お花を摘んでくる。」つて言つてその茂みに入つていったわよ？お花を摘む趣味なんて意外とかわいいとこあるじゃない。」

「ちつくしよおおおお！どいつもこいつもふざけやがつて!」

「んもー、そんなに慌ててどうしたのよ？カルシウムが足りてないんじゃないのカズマさん?」

「ああー!だからもうじきここにヤベー奴が来るん…」

ズツシャアアアア!

地面を深くえぐり、土砂をまき散らしながら目の前を鉛色の巨人が滑りながら通り過ぎていく。そして止まった後こちらをぐるんと見た。

「「ヒッ!」」



「ちよつとカズマじゃん!?こんなものいるなんて聞いて無いんですけど!」

「俺だつて知らねえよ!おいめぐみん!お前のせいでこんな…つて気絶してやがるううう!」

あまりの恐怖に意識を思わずポイ捨てしためぐみん。

カズマは驚きで思わずめぐみんに回していた手を離してしまった。

「ぐえつ!」

地面とキスをするめぐみん。

(マズいマズいマズいっ!相手はどう考えても格上!まともにやり合っても無理!無理ゲーすぎる!交渉つて…話通じんのかっ!?!でも取り敢えずは…)

「スイマセンでしたー!」

日本人が誇る最終極奥義、DO☆GE☆ZA☆である。

「うちのパーティーメンバーがあなた様に大つ変な粗相を働き、申し訳ありませんでした!その頭のおかしい爆発娘は煮るなり焼くなり好きにしているので、どうか命だけは、命だけはお助けをー!おいアクア!お前もさっさと頭下げろ!」

「ええ!私女神よ!?!女神が土下座なんてするわけ…」

「いいからとつと頭下げろ!」

「痛たたたたっ!ちよつ、髪引つ張らないで!わかつたわよ!土下座するからあああ



をしたまま動かなくなつた。

「…何やつてんだよおおおおお！」

「重ね重ね申し訳ありませんでした！あの馬鹿ダクネスには何してもいいので、命だけは！お助けをー！」

佐藤和真、16歳。魂の叫びである。

頭を必死に下げて土下座していると、不意に襟を掴まれて無理やり立たされた。赤と金の双眸と目が合う。そして巨人は右腕を振りかぶる。脳裏に一撃で真つ赤な煙となつたジャイアントトードがフラッシュバックされる。

（ああ。俺、ここで死ぬのか。）

「カズマさん!？」

不意に股間が温かくなる。

（ゴメンな。前世でも今世でも実際に使つてあげなくて…。）

相棒にそう語りかけた後、あのとき引き返していればこんな事にならなかつたのにと後悔した。そして、





そして視線を巨人に向けた先には、  
『近くの街まで案内してください。』  
と書かれたカンペがあつた。

「……………は？」

## 頭のおかしいパーティー＋バーサーカー

カエル潰してたらめっさお仲間さんが集まって来たんだがw  
もう斧剣でグジュグジュすんの飽きてきたし殴ってみつかw

斧剣を適当に放り捨て、近くのカエルへと飛び込む。

HEY YOU！ハートキャッチしちゃうぞw

カエルの胸へと思いつきり拳を握って振り下ろす。

インパクトの衝撃は余す事なく、全てカエルの身体に吸い込まれて一瞬動きを止めたあと、文字通り爆発した。

うつわ汚えw ちよっ、カエルの体液口ん中に入ったんだがw ハートキャッチ（物理）できなかつたわw

てかこの身体、俺ちゃんって殴り合いの喧嘩もした事ない優等生いい子ちゃんだったのに、何か戦闘慣れつつーか殴ろうとか思ったら身体がスーって動くんだよなあ。

ほんと、いくらヘラの身体って言ったって素人が殴る拳でカエルが水風船を爆発させたいにならねえだろw

…ならねえよな?…でも剣圧だけで自動車吹っ飛んだり、道路が割れてたりしたよな?…カエルくらい血煙にしてもおかしくなくね?

まあそれは置いといて、もうホント身体が自動で動くっつーか、ヘラの経験値が活かされてるってみたいなんかねー?

よし!考察終了! とりま残り潰すかw

つて、え?なあにこれえ?何か魔法陣ぽいのに周り囲まれてるんですけど?しかもどどん魔法?って感じの高まって来てるんですけど! 何か猛烈に嫌な予感すんだがw 私知ってる!これってスキルの心眼(偽)ってやつが反応してんだよね!?はよ出ようつとw

魔法陣の中心から飛び退いた瞬間、空間が爆発した。

土埃がもうもうとする中、地面にふっ飛ばされて寝転がっていたが直ぐ様はね起きた。

痛つてええええー!マジ痛えww 何かもうTNTどんだけ使ったんだよつて爆発起きて、咄嗟に自動で庇うように左手動いたんだけど、黒焦げなってんじやんやばww 中心だと絶対対お亡くなりコースだったわw

【悲報】俺氏の左腕、備長炭になったんだが(画像付き)

やべえ、脳内でスレ思わず立ててしまったw











うわ！このペンめっちゃスイスイ書けるんだが！すっげえw

ほら少年、コミユニケーションの時間だよーw

…何ですつと目瞑ったまま無視されてるんですかねえー？

ほらその髪の毛青色系ガール？何とかしてくれ。

『近くの街まで案内してください』と書かれた紙を水色ガールに見せる。

「は……？もういきなりビックリしたじゃない！カズマさんがピチューンってなると思ってたわ！もう驚かせないですよ！」

「って、あなたって近くの街って言うとかアクセルに行きたいの？」

コクコクと頷く。

「ふっ。わかったわ。この水の女神であるアクア様が導いてあげるわ！感謝しなさい！」

髪をかきあげながら勢いよく言うアクア。

ん？今女神って言わなかったか？やっぱ何かそこの少年とかロリイタと存在が違う気がすんだよなー。

…あーだからか。ヘラクレスって女神ヘラに人生狂わされてたからなー。そりゃ神様嫌いなところもあって、それが自分に引き継がれてたから嫌な感じしてたってそんなところかねー？ま、何かこの女神って頭軽そうだし適当におだてますかw

『さすがアクア様！美神！頼りになる！』

「ふふーん！あなた中々見どころあるじゃない！私の信者にしても構わないわよ！」

『あ、結構です。』

「何ですよ!？」

信者になる事を執拗に迫られたが何とか振り切った俺ちゃん。

向こうではずっと目を瞑ったままの少年に頭の弱そうな女神がグーパンをしている。

…何かあの女神ちよつと心配になってきたし少年にもカンペ見せるとしますか。

~~~~~

「いやー、本つ当に迷惑をかけてすいませんでしたアルケイデスさん！うちの馬鹿共が大変迷惑をかけて！」

『何、気にするな。』

「やだ！アルケイデスさんが漢前すぎて惚れそう。」

少年たち一行と近くのアクセルという街に向かう俺ちゃん。少年、いやカズマと、ヘラクレスの名前は有名すぎるので転生キッズに目をつけられるかもしれないのでヘラクレスの幼名だったアルケイデスと自己紹介をした後にカズマの連れを紹介してもらう時は少々問題があったが、概ねノープロブレムな現状。少し振り返ってみつかw

・めぐみんの場合

「ほらさっさと起きろよめぐみん。」

そう言つて地面で気絶しているロリイタをゲシゲシと足蹴にするカズマ。扱いがひでえ…。

「んー、はっ！私生きてる！それにカズマ無事だったんですね！あの筋肉だるまの巨人にとつくにミンチにされてると思つてましたよ！」

「…お前、後ろ見てみる。」

「何つて、ギャアアアアア！何でまだいるんですか!?!」

「お前アルケイデスさんに失礼だろ!?!爆裂魔法食らわせといて！ほら謝れ！」

「え!?!この見た目ですよ!?!どう見たつてやべえモンスターじゃないですか！人間とかありえないですよ！」

「お前本つ当に失礼なやつだな！ああすみませんアルケイデスさん！こいつはちよつと、いやかなり頭がおかしいだけなんで許してやっってください！」

「頭がおかしいって何ですかカズマ！ええ？私のどこが頭おもしろいか言つてみてくださいよ！」

「全部だよ!?!その妙にチンピラ臭い態度とか厨二臭え言動とか頭のおもしろい行動とか！」

「っ!? よくも言ってくれましたねカズマ! いいでしょう! その喧嘩買ってやりますよ!」

「ハッ! 爆裂魔法撃って身動き取れないくせに何を言っているのかなこのロリは!」

「ロリっ!? ふふふカズマ。あなたは言っではいけない事を言ってしまったね!」

「取り敢えずさつさと頭下げろ!」

おう…。カズマが少女の頭を無理やりこちらに下げさせている。

「ほら謝れよ。」

「…………ごめんなさい。」

「ああん? よく聞こえねえぞ?」

「うっさいですね! あなたは私のお母さんですか!」

「お前みてえガキなんていらねえよ!」

また話が脱線して騒ぎ出した二人。

…ぐだぐだしてんなー(遠い目)

「おっほん! いやいよこの私が名乗りを上げる時が来ましたね!」

「さつさとしろよ。ダクネス起こさなきゃいけないんだから。」

「…………我が名はめぐみん! 紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操りし者!」

『アルケイデスだ。』

「おいめぐみん、無理してわざわざ立つなよ。膝ガツクガクだぞ?」

「これには様式美と言うものがあつてですな…、あつカズマ!ちよつとその膝ツンツンすんのやめてもらえませんか!?!」

「だが断る。」

「なああああああつ!」

あ、めぐみんが地面に倒れた。…にしてもカズマいい笑顔してたなあー。

「それじゃ次行きましょうか。」

お、おう…。

・ダクネスの場合

「おいダクネス、起きろよ。」

カズマが声をかけるも女騎士はピクリとも動かない。

「起きなきゃひついでえ事すつぞ?」

女騎士は動かない…?ってん?何か息荒くなつてね?

カズマは頭をガシガシと掻きむしりながら、

「今起きたらものすんごく酷い事とは何だカズマ!詳しく聞かせろ!そして私に実行しろ」

「そのものすんごく酷い事とは何だカズマ!詳しく聞かせろ!そして私に実行しろ」

！」

「やっぱお前起きてたじゃねえかああああ！」

「それでそのものすんごく酷い事とは何なんだ！」

うわあ。めつき興奮してんじやん。もしかして…

「誰がお前にそんな事するかよ！嘘に決まってるだろ馬鹿！」

「なっ?!嘘だったのか!?!…上げて落とすタイプか。くうん！」

あ、こいつドMだ（確信）。

「ほらお前勘違いして斬りかかったんだから謝れよ。」

「仲間の危機だと勘違いしたとはいえすまなかった。許されるとは思っていないがどうか謝罪を受け取ってほしい。」

そう言っ頭を下げる女騎士。

『何、あれはそう取られてもおかしくない状況だった。』

ペラッ。

『だから気に病むな。謝罪を受け取ろう。』

「すまないな。助かる。」

（めぐみんと違ってえらくすんなり謝ったな…？てかやっぱリアルケイデスさんいい

人すぎる！人って見かけによらないんだなあ…。」

「ところで貴公を見込んで頼みたい事があるのだが…？」

『何だ？』

(猛烈に嫌な予感…！)

「私をそのたくましい腕で殴ってくれ！」

「はいダウトオオオオ！」

「何だカズマ？今は邪魔してほしくないのだが？」

「何だカズマじゃねえよ！今までの流れが台無しだよ！ぶち壊しだよ！」

「しかし…あの頭から突き抜けて行くような痛…、快感が忘れられないんだ！デコピ

ンであれだけなら殴られたら私は一体…、くうっ！」

「なぜ言い直した！今なんで言い直したんだよ！」

「頼む！後生だから私を殴ってくれえええ！」

ええ…。ガチもんのやべえやつ変態じゃねえか…。

「先程は少し取り乱してすまなかつたな。私はダクネスと言う。」

(少し…？)

『アルケイデスだ』

「そうか。よろしく頼む。…やはり軽くデコピンだけでも…?」

「却下だこの変態クルセイダーが!」

「はぁん!」

回想終了。うん、なんつーか全員キャラ濃すぎだろw

「アルケイデスさんってアクセルに何しに行くんですか? あつ、答えられたらでいいんですけど?」

うーん何と答えたものかw? カズマたちは冒険者をやっていると聞いていたな…。よしそれで行こう!

『冒険者登録をするため。』

「え!? アルケイデスさん冒険者登録してなかったんですか!?!」

「本当か!?! あの強さで冒険者登録をしていなかったとはな…。てつきり私もどこぞの高ランク冒険者かと思っていたが、確かにそのような人物など聞いた事なかったな…。」

「それでどうしてそのカンペなんて使ってるんですか?」

と、一行たちが気になりながらも聞かなかった事をめぐみんが聞き、

「それぞれ! 私も疑問に思ってたの!」



アクアがそれに便乗した。

やつべw　なんて答えようw　確かに普通に話せばいいもんなw  
慌てているところをカズマが、

「お前らそんな地雷わざわざ踏みに行くなって！ほら本人も訳アリ感出してんじゃん！気にしないでくださいアルケイデスさん！」

フオローしてくれた。いやー助かったわwマジで。

「ところであなたから神性みたいなの感じるんですけどお父様かお母様どっちか神なの？」

「だから聞くなって言うってんだろおがおあああ！」

そんな事を駄弁りながら進んで、

「あ、見えてきましたよ。」

アクセルの街に到着した。

## 冒険者登録

「だあかあら！俺はこのアクセルを裏で牛耳ってるスゲえ奴なんだぞ！それをあの衛兵どもは……」

ドンツと乱暴にクリームゾンビア・クリームゾンネロイド、いわゆるシユワシユワが入っているジョツキをテーブルに叩きつける。

「おいダスト。いい加減昼間っからそんなに飲むのやめろって。」

「るっせえ！飲まなきややつてらんねえよ！」

グビグビと飲むダスト。やがて空になり、

「おーい！もう一杯追加だ！」

その様子をパーティーメンバーは呆れて見ていた。

「おいおい、ダストまたずいぶんと荒れてんな？あいつ今回は何やらかしたんだ？」

「ああ、本屋で立ち読みしてた女のスカートの中を這いつくばって見ていたら、気付かれてそのままハイヒールで頭踏まれてから衛兵に突き出されたらしいぞ。」

「あいつも懲りねえよな…。」

「つたく、俺ほど謙虚に慎ましく生きてるヤツは中々いねえのによお！酒と肉と女と金！それさえあれば何もいらねえ！」

ダストには是非とも一度、辞書で謙虚と慎ましいの意味を繰ってほしい。周囲がそう思っていると、突然何かに気が付いたように一人の冒険者が入り口を凝視する。すると他の人もつられて首を動かし、そのまま動かなくなつた。

「つたつく何だ？お前ら俺の話聞いてんのかあ！さつきから黙りやがってよお！一体何見て…？つ！？」

（何だよアレツ!?!）

周囲の喧騒もいつの間にか止んでいたので首を入り口付近に向けると、そこには鉛色の巨人がいた。

そのまさに鎧のように発達した筋肉は見る者を圧倒させ、右手にはその体軀に釣り合つた、常人では振るうことさえ叶わないだろう大ききの斧剣を持ち、全身から容易にわかるほどの強者の風格が立ち上つていた。そしてベツトリと斧剣と身体の至るところに血が付いていた

巨人が一步進む。それだけの動作なのにまるでぽっかりと大きく口を開けた、絶対的

な捕食者が近づいてきたように感じられた。

周囲の音が一切存在しなくなったかのように感じられる中を、巨人は床に大きな悲鳴をあげさせながら受付けへと進んで行く。

そして受付けカウンターの前で止まった。

「ぼ、冒険者ギルドによ、ようこそ……きよ、今日はどうされまひたか……？」  
職業意識からか、声を何とか捻り出す受付け嬢ルナ。

その巨人はしばらく動かずに停止していたが、そして……

~~~~~

「あつ、あれが冒険者ギルドです！」

うつひよw とうとうやって来ましたよ冒険者ギルド！ 中世っぽい建物とか、エルフ耳とか、もういかにもRPGに出てきそうな服着た人とか歩いてっし、もう街の中だけで興奮やべえw

「冒険者登録は受付けでするんですが……」

『わかった。』

よし少年たちよ！行ってくるでw

「カズマさん、カズマさん。登録するとき手数料かかるんだけどアルちゃんお金持ってそうに見える？」

「いや俺今から説明しようと思っ…ってアルちゃんって何だよ!?!めっちゃ気安いなお前!?!」

「えー、だつて何かシンパシー感じるしー?…こう、神的オーラっていうか?…んー、人と神のハーフ的な?」

「何ですかそのかつこいい設定!?!あの筋肉たるまには勿体無いです!」

「黙れめぐみん。てか筋肉たるまなんて絶対にアルケイデスさんに言うなよ?まあ目が合うだけで気絶するようなビビりならそんな度胸ねえか。」

「プークスクス!どう考えても漏らしてた男の言うセリフじゃないわね!」

「なっ!」

「えっ、カズマ漏らしてたんですか!?!どうりで変な匂いするなっと思ってたんです! バツチい!下ろしてくださいっ!」

「も、漏らしてないし!?!てか背中で暴れるな!」

「漏らす程のプレッシャーとは…くうっ、私も味わってみたい!そしてゴミのような目つきで見られたい!」

おーおー。何か入ってたらめつき見られてるんですがw えっ何でこんなに俺ちゃん注目されてんの？（困惑）

ハッ!…なるほど、そうか…。

俺ちゃん上半身裸だからかw

そつかw いきなり上半身裸で筋肉ムツキムキの男が来たらそりやビビるよなw

↑違うそうじゃない

やつべw やばいやツつて思われてつかもw ↑別の意味で思われている

取り敢えず受付けのお姉さんのところに行きますかw

受付けカウンターまで来たんだが、このお姉さん大つきいw（どこがとは言わない）  
やつべ、めっちゃはみ出そうじゃんw 俺ちゃんの大つきなお手で隠してあげましょうかw（ゲス顔）

「ぼ、冒険者ギルドによ、ようこそ…!きよ、今日はどうされまひたか…?」

おっと、胸を見ていたことがバレちゃいましたかw 声が上がってらっしやるw てかあなた嘸みまみたよね? ごほん! まあ取り敢えず冒険者登録しますか。自分は立派な紳士だからネ!

よし、かきかきつと。このペンってマジでどうなってるんだろうな?」

『冒険者になりたい』

「そ、そうですか…。えーっと、では最初に登録手数料がかかりますが…。?」

……は?金取んの?

プギヤwwww 俺ちゃん無一文なんですけどw

詰んでるw え、どしよ?カズマたちに借りるのもいいけど、話聞いてたら毎日が苦しそうだしなー。馬小屋で寝るってw

おつ、あそこに酒持つてる冒険者(仮)いんなー。こんな昼間から酒飲むとかいい身分だなおい。羨ましい!まあそんな訳でお金に余裕あるつしよ。頼みにいきますかw

「おいあの大つきいやつこつちに来るぞ!」

「もう威圧感やばすぎでしょ!」

「おいキース!リーン!テイラー!待てよ!」

ダスト以外は立っていたためそそくさと逃げることが出来たが、座っていたダストは一人取り残される。

「つ!?!何だよ!」

鉛色の巨人はダストのすぐ側に立つ。近くで見ると、その巨体はより大きく感じた。

その巨人はどこからともなくカンペを取り出し、

『冒険者登録用の金』

ペラっ。

『貸してくれないだろうか？』

とめくった。

「は、はあ？何でこの俺がてめえに金貸さなきゃなんねえんだよ？」

ビビっていたが、持ち前の反骨精神で何とか取り直す。

その瞬間、巨人から放たれるプレッシャーが一気に重くなった。

身体がガタガタ震える。どう足掻こうが勝てない。無様に為す術もなく殺される。

そんな思いが湧き上がる。

そして生存本能が囁く。今すぐ逃げろ。泣いて許しを乞えと。

巨人が顔を近づける。赤と金の瞳と目が合う。それだけで心臓がもう爆発してしま  
うんじゃないかと思うほど早鐘を打つ。

一体どれくらいの間時間が経っただろうか。まだほんの数秒かもしれないし、一時間  
経ったのかもしれない。極度の緊張感に晒されて、時間の感覚がわからない。もう限界  
だった。

「っ！これやるよー！」



そう言つて金が入つた袋を投げ出す。

『こんなにもらつていいのか?』

「いいよ!」

早く自分の前からいなくなつてほしい。その一心で叫ぶ。

『感謝する』

そして目の前から巨<sup>絶望</sup>人は消える。

(助かつた……!)

助かつたという安堵により、一気に緊張感が緩んだダストは、

「ブリュっ!」

白目を? いて失禁をしながら脱糞をして床に倒れた。

へい! そのお兄さん! この恵まれない俺ちゃんにマネー貸してくんない?

「っ?! 何だよ!」

おつと書かなきゃわかんないよねー。よしこれでよしつと。

『冒険者登録用の金』

ペラっ

『貸してくれないだろうか?』

「は、はあ? 何でこの俺がてめえに金貸さなきゃなんねえんだよ?」

カツチーン。今のはちよつときすがの俺ちゃんも傷付いちゃいましたわー。もつと言いつてあるでしょ? まあ確かに金貸す理由とかないけどさー?

もう思わず眉間に皺が寄っちゃたよー。ここはもう少し粘ってお願ひしてみますかね? ほらこつちも人にお願ひするときは目合わせなきゃ、誠意足りてないしね。

ジツと見てみる。ねえーお願ひい。お金貸してよおー。

何か急に汗かき始めたなー。どうしたんだろ? どつか具合悪いんかな? このどこかチンピラじみたお兄さん。

「つこれやるよー」

おつ、何か袋投げてきた。キャッチしたらチャリンって小気味いい音したしお金めっちゃ詰まってんじゃんw 結構入ってんだけどしこんなにもらつていいのかな? 一応聞こうつと。

『こんなにもらつていいのか?』

「いいよー!」

いやー助かったなー。このお兄さんには本当に感謝しないとなー。ありがたやーありがたやー。

『感謝する』

さーてやつと冒険者登録だw

「ブリュっ！」

何か音したから後ろ振り返ったら、お兄さんが白目剥きながら股間を濡らして、ケツの方から嫌な音を立てて床に倒れていた。

……よっぽどトイレに行きたかったんだろーな（震え声）

「うわっ！ダストのやつ、失禁しながらクソ漏らしてやがる！」

「きったね！てか臭っ！おい誰かクリー清浄魔法ンかけてやれよ！」

「嫌よ！近付きたくないし！」

その後、ダストは意識を取り戻すまでそのまま放置された。

「よかったわねカズマ！漏れ友が増えたわよ！」

「よかったですねカズマ。あつ、匂い移るんで半径3メートル以内に近づかないでください。」

「くっそおおおおお！」

『これで足りるか？』

「はい……。」

お姉さんが目を合わせようとしなのは俺ちゃん気のせいなのかな？かな？

「それでは改めて説明を。各冒険者には職業というものがございます。そしてこれが登録カード。冒険者がどれだけ討伐したかも記録されます。」

やっと調子が出てきたのか声に震えが無くなって来たお姉さん。にしてもそのカード便利じゃね？マジでどういう仕組み？

「レベルが上がるとスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、頑張つてレベル上げしてくださいね！」

溢れ出るRPG感w w ジョブ選んだらそのその職業のスキルツリーが開放されてくつて感じねw おけまるw

「それではこちらの水晶に手をかざしてください。」

へー、ステータスとか出てくるんですね分かります。

にしても注目されてんなw 背中にピンピン視線を感じるぞいw

おー、手かざしたら水晶から光が出てカードに何か刻まれてくw すっげえw

「これでステータスが分かりますのでその数値でなりたい職業を決めてくださいね。」

「はいありがとうございます。えつと…アルケイデスさんですね。はああああ!!? 知力だけ他より劣っていますますがその他の全パラメータが高ランク冒険者と同等、いやそれ以上ですよ!?!特に筋力の数値が桁違いです!こんなステータス見たことありませんよ

！規格外ですよ!？」

はへー、やっぱバーサーカーはスゲえー。(小並感)

「魔法使い職は無理ですがそれ以外だと何でもなれますよ!？」

「クルセイダーやソードマスター、アークプリーストなど上級職も全て開放されてますし!？」

周囲からざわめきが響く。んーキモチいですわ w

でもお姉さん?これって盛大な個人情報暴露ですよね? (真顔)

「うー、いくらアルちゃんだって女神である私の初期ステータスを超えているなんて許せれないわ!」

「そうですよ!というか魔法使い系職になれないなんてやっぱり脳筋じゃないですか!？」

「お前らマジで黙ってろおとおお!」

「それで何の職業を選びますか!」

お姉さん興奮してんなー。あれだわ。興奮してる人見てたら逆に冷めるってやつだわ。てか職業なんてとつくにもう決めてっし。

『バーサーカー狂戦士で』

お!お姉さんの顔が引き攣ったぞい?

「狂戦士ですか…？狂戦士は確かに攻撃力はソードマスターに並び、それ以上の火力もスキル狂化の使用によつては出せますが…。攻撃には打たれ弱くてその…攻撃が過激というか味方も巻き込むというか…。ソードマスターはどうでしょうか!?狂戦士と同じく攻撃特化ですよ！」

『狂戦士バーサーカーで』

「えっ！なら…！」

狂戦士とは確かに攻撃力はトップクラスの攻撃力を誇っているが、狂化スキルを使うと味方を巻き込んでも一切無視し、また防御系スキルも存在せず、突撃するだけが脳で協調性皆無であるため、パーティーに余り誘われぬ不遇職である。そのためルナは説得を試みていたが、無言で『狂戦士バーサーカーで』と書かれたカンペを持ち続けているので諦めた。

よし！ひたすら『狂戦士バーサーカーで』ってカンペで意思表示して、何とか違う職を勧め続けるお姉さん振り切つて狂戦士を確保したでw

「ええ…狂戦士か…。」

「あんなものの攻撃に巻き込まれたら死ぬぞ…？」

「狂戦士はちよつとね…。」

「ごほん！それでは冒険者ギルドによろこそアルケイデス様、スタッフ一同心より今

後の活躍に期待しております！」

まあもうすつこと終わったし、街の中適当に歩いてみつかw 幸い金はあるしw  
おっぱいおつと、お姉さんありがとねw 明日からクエスト受けに行くよw

嵐のようにやって来た鉛色をした巨人は堂々と入り口から出ていった。そして後に頭のおかしい狂戦士バイサーカーと呼ばれる男の冒険が始まる…かもしれない。

~~~~~

その夜…

まさか自分が寝れるベッドなくて馬小屋に泊まるとか草w はよ寝よつとw

「はあー、今日は疲れたなー。」

「ねえカズマ！アルちゃん私達のパーティーに誘わない？絶対に活躍してくれるわよ！」

「え…。まあアルケイデスさん確かに強いし、1回だけ仮になら…」

（ん…？何かいつもの俺らの寝てるとこの横に黒くて大きいもんが…つてアルケイデスさんじゃん!?めっちゃ爆睡してるし！）

「あらアルちゃんじゃない！ちようどいいわ！ねえアルちゃん、この水の女神たるア

クアがいる私達のパーティーに入らないかしら！」

「おまつ！アルケイデスさん寝てるんだから起こすなって……！」

「んもー。アルちゃんなかなか起きないわね。ほら頬つんつーん。」

（あああああああ！）

アクアが屈んで頬をツンツンしようとした瞬間バーサーカーは寝返りをし、アクアの顔面目がけて裏拳が飛んで、食らったアクアは吹っ飛んでいった。

「アクアあああああ！」

「おいこらさつきからうっせえぞ！」

「すんません！」

■■■■■■ーーZZZZ

→騒ぎに対して一切起きる気配がなく爆睡